
世界は君のために

朱希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は君のために

【Nコード】

N0612X

【作者名】

朱希

【あらすじ】

一年に一度見る夢。それはその日一日の悪夢の始まりでもあった。しかし、今年もその夢を見た優衣に訪れたのは悪夢でもなんでもない、異世界の王子様だった。

『約束だ。僕が結婚できるようになったら、必ず、迎えに行く。』

その笑顔はとても眩しくて、けどとても悲しい笑顔だった。

世界は君のために 0

p i p p i p p i

目覚ましの音に驚き目を覚ますとなんと7時にセットしておいたはずの目覚ましが8時だった。

そして夢を思い出す。

そうか、年に一度の悪夢の日がやってきたのか・・・

急いで下に下りると母親が元気に起きていた。

「優衣ちゃんおはよう」

につこり笑顔のお母さんに殺意が沸いてもいいはずだ。いや、自分で起きなければならぬのだけれども・・・

「お母さん！！何で起こしてくれなかったのさ！！」

「あらあ、お母さん起こしたわよ？」

「聞こえなかったよ！！悪夢なんて見るんじゃないー！！！！」

お母さんに逆切れしながら朝ごはんを口に入れる。

ご飯が喉に詰まりそうになりながらも、2階へ上がり制服に着替え、荷物を持って玄関を開け家を飛び出す。

くそ！全部あの夢のせいだ！！！！

走りながら夢を回想する。

「そっか。今日はクレバー様の…」

まさかお母さんがこんなことを呟いていたなんて思いもよらなかった。

あの夢は物心付いた時から年に一度この時期に見る夢だった。

幼い自分と知らない外国人みたいな男の子が出てきて少しだけ話をする。

そして最後に結婚を申し込んでくるのだ。

あんな男の子に会ったことあったっけ？と思うのだが、そんなことが問題ではない。

あの夢を見るとその次の日色々ついていない日になる。

初めて見た幼少時代には雨で水たまりができたところに車が通り私をびしょぬれにさせた。

ある年には階段から落ちた。起きたら病院だった。

本当にこの夢は、私を殺す気か！！！！

今回も目覚ましが鳴らないし、しかもみる。

いつの間にか犬の糞を踏んでいる。なぜ？！

今日もいろいろと覚悟をしとかなければならないなとため息をつくと高校へ向かった。

「…はあ。」

はつきり言おう。今回のついてなさは異常だ。
どうあがいてもやはり遅刻は遅刻だった。

そして昨日確かに今日の曜日の準備をしたはずだ。
しかし何故か違う教科のものばかり入れている。

体育の時間にはボールが当たり即保健室行き。

帰りには鉢植えが真上から落ちてきて危うく、本当に死ぬかと思っ
た。

げっそりしながら家に帰る。

やっとほっとできる。やっと今日が終わる。

「ただいまー」

「おかえり、僕の可愛いユイ。」

ウキウキしながらドアを開けるといかにも王子様という格好をした
男がいかにも王子様だと言うオーラをまとい私を迎えた。

一度玄関の戸を閉め再び開ける。やはりやつはいた。

「えっと…誰？」

思わず言ってしまうてもいいだろう。はつきり言ってこんなキチガ
イ男知らない。

現代の日本でこんな恰好するやつなんている…？少なくとも私の知
り合いにはいない。

髪の毛も金髪だが、こんな染めている奴なんて近くにいないし外国
人も残念ながら知り合いにいない。

とにかく初対面のはずだ。

なのにどうして私の名を知っていて、私の家で私を迎えるの？

頭の中はパニック状態だが王子様（仮）はにこにこ私に中へ入る
ように促す。

いや、ここ私の家だから。

リビングへ行くとお母さんが座っていた。

「お母さん！！！」

あんなへんてこお母さんでも家族だから安心できる。
ついつい抱きしめてしまった。

何なのこのキチガイ男！！早くどこかやってよ！！

目で訴えるがお母さんには全く通じていないのかニコニコしている
だけだった。

「優衣ちゃんおかえりなさい！待ってたのよ？さあ、陛下もどうぞ」
「ありがとう」

やつは私が座った隣の席に座った。

ん？陛下？

隣を瞬時に見るとやつは先ほどと同じようにニコニコと笑顔だった。

「ユイ、どうしたの？」

「陛下って…？」

眉をひそめその陛下とやらに質問する。するとお母さんがティーセ
ットを持って現れた。

「あらあ、陛下のこと覚えてないの？あれだけ求婚されていたじゃ
ない。」

「は？」

知らないんだけどこんな男。

ますます眉をひそめると私の顔色なんて全く気にしていないのか陛
下の笑顔がさらに明るくなる。

「やつと迎えにこれた。さあユイ、結婚しよう。」

やつが私の手を救うと手の甲にキスを送った。

なっなんてことを…！！！！

思わずガバツと手を払う。

「なっなにすんのよ！！！！突然…！！大体私あなたの事知らないっ
！！！！」

「まあ、優衣ちゃん。」

「キサラギ嬢、あまりユイを責めないでやってくれ。迎えに行けな
かった俺が悪いんだから」

悲しそうな顔でそう言つとさらに私の方へ近づいてくる。いや、近づきすぎ…

「ユイ、俺はサルバハート王国の王、クレバーⅡギルティア…サルバハートだ。」

え、なに途中の…（てんでんてん）そして何その王国名。初めて聞いたんだけど

「ユイを迎えに来た。俺と結婚してください。」

再び私の手を取り優しく唇を落とす彼。

この言葉に頭が真っ白になりながらふと朝の夢を思い出した。

『約束だ。僕が結婚できるようになったら、必ず、迎えに行く。』

え、

も、もしかして夢の中のやつって…!!?

01（後書き）

新連載です。よろしくおねがいします。

活動報告にて募集をかけております。もしよろしければ参加いただければと思います。

「ユイを迎えに来た。俺と結婚してください。」

ちよつと待つてちよつと待つて…

意味がわからないんだけど、わけがわからないんだけど、

「お、お母さん」

「優衣ちゃんやっぱ覚えていなかったのね。結婚印を封印した仲なの。」

ぐずぐずと泣きまねをするお母さんに呆然とする。

結婚印…！？なにそれ！？

「昔首筋に変なほくろできたって言ってたでしょ？それが結婚印よ。」

とつさに首筋を触る。

これが結婚印だったのかー！！

つてこんなことしたの全く覚えてないんだけど！！

「それよりも優衣ちゃん実はね…」

久しぶりにお母さんの真剣な顔を見たかと思うと突然家中に地震のような揺れが起こり始めた。

「なつなにこれ！？」

必死にお母さんにしがみつくがお母さんはにっこりと笑うと私を某陛下に差し出す。

すると後ろから足音が聞こえてきた。

「陛下、キサラギ嬢。もうお時間かと。」

「ああ。」

「わかつてるわ。」

なんの話？わけがわからないとお母さんと某陛下の方を行ったり来たり見渡しているとお母さんが突然私のおでこにキスをする。

「お母さん！？」

「この国での結婚印は必ず結ばれなきゃならない”運命”になる。だから優衣ちゃん、あなたは行かなければならない。」

「なんでっ」

なんでお母さんがそんなこと知ってるの！？

「優衣ちゃん、ずっとあなたに謝らなければならなかったの。」

「おかあ、さん…？」

「ママはね、この世界の住人じゃないの。違う国の住人。今はクレバー様が治めているサルバハートの人間なのよ。サルバハートからの逃亡者。」

何を言っているのか全く分からなかった。

「私はもう行くことができない。私には呪いがかけられているから。今まではクレバー様の魔力で守られていたけれど、また逃げなければならぬ。けどね、優衣ちゃん、あなたはあの国に祝福されている。だから大丈夫。」

再びおでこにキスをされる。しかし目の前が涙で全く見えなかった。そしてお母さんがいつも肌身離さず持っていたペンダントを私の首にかけた。

「優衣、あなたにだけは幸せになって欲しい。そのペンダントが壊れない限り、私はずっと生き続ける。あなたは必ず生き続けることができる。」

ふわっとお母さんの体が宙に浮かぶ。

待って、私

「大好き、ずっと、ずっと。大好きよ。」

その瞬間に私の視界からお母さんはいなくなった。

「ユイ」

陛下が私を支えてくれるが涙が止まらなかった。

「陛下。 私たちもそろそろ。」

「・・・ああ。 ユイ、 私たちもそろそろ行かなければならない。
しかし私は首を振る。 いやだ、 嫌だよ。」

「おかあさんといっしょに、 いきたい。」

あんな変な人でも私の大好きなお母さんなのだ。

突然見知らぬ土地に連れていかれるなんて御免だった。

「だめだ。 この運命は逃れられない。 ユイ、 一緒に行ってくれ。
でない」と

突然自分の体がふわっと浮かびあがった。

どういうこと!?

陛下が必死に私の方へ手をのばしてくる。
しかし

「いやだ!!!」

陛下の手を振り払う。

するとさらなる浮遊感を感じる。

そして光の中へ消えて行つた。

『陛下、本当に、よろしいのですか？』

『僕はユイの事を愛している。その覚悟はできている。』

『あいしている？』

『ああ、僕はユイの事を愛している』

―し、もし？
何？

目をうつすらと開けるとり。人形が私の目の前で浮いていた。
え？り。ちゃん人形が私の目の前をういている…！？

「ぎゃああああ…！！！！！！」

どどどと言つこと！？

後ろには普通の…いや、とても可愛い女の子が立っていた。

「あ、あのこれっこの人形……!!!」

【人形！？違いますっ！私は精霊のヴィレですっ！】

「喋った……!!!」

もう呆然とするしかない。精霊ってあんた……まじで？

確かに目の前で小人が宙に浮かれると納得せざるを得ない気もする。

【ろい様あゝ】

うるうると精霊は後ろの女の子の方へ向かう。

「突然行くからびっくりしてしまったのよ。えっと、大丈夫でしょうか？」

「は、はい。」

「よかったです。先ほどあちらのベンチで読書をしていたらヴィレが突然倒れている女性を見つけたと言ってくるものだから駆けつけたのです。今いる場所は私のおうちです。」

「ごめんなさい……」

そして私は今まで起こったことを思い出した。

私、光の中に吸い込まれて、そして……

「あっあのっ……!!!」

「はい？」

「ここはどこですか!?!」

「どこ？サイーユ地区の……」

「地区じゃなくて国!」

「国は……サルバハートです。」

「!?!」

やっぱり来てしまっていたのだ。

「あの……」

「サルバハートだあ……？知らないよ。そんなの。私を帰してよ……」
へたりと崩れると女の子が私の体をぎゅっと抱きしめてくれた。

「その、昔よく母にこうしてもらっていたんです。そしたら、安心できたから。」

「うっ……」

そして私は泣いた。
今までに起こったことへの苛立ち、これからへの不安。
全部全部詰まった涙だった。

「落ち着きましたか？」

「うん。」

目をこしこしとこするとふと我に返る。

「ごっごめん！！見ず知らずの人なのにこんな看病なんかしてくれちゃって、ほんと、つかあれ？なんで言葉通じてるの？」

一人で勝手にしゃべっていると女の子がくすくすと笑い始めた。
恥ずかしい。

「すいません。あなたのような元気な方を見たのは初めてで……」

「ごめん、迷惑だったよね。」

「いいえ迷惑だなんてとんでもないです。私も久しぶりに同年代の方とお話できてとても楽しい思いをさせていただきました。」

【ヴィレもっ おねーさんのアクアが凄く気持ちが良いから元気出しました！】

アクア？よくわからないんだけど。

「けど申し訳ないな……あ、そうだ！できることがあれば何かするよ！」

「いいえ、そんな、」

すると突然彼女はうつむいた。

「こんなに楽しい思いをさせていただいただけで十分です。」

「じゃっじゃあわかった！いっぱいおしゃべりしよう！」

私はとても一生懸命だった。

ただただ、この子を悲しませなくなかったのだ。

「あなたが寂しい時、つまらない時、おしゃべりに来る！どうかな？」

はははと苦笑いすると彼女の目から涙があふれた。

「えっごめん！うざかったかな！？」

「いいえっ…嬉しいのです。私こんなこと言われたの初めてで…家が下級貴族だからずっといじめられていて、だから、学校にも行けなくて」

「え？」

「だからこんな風に接してもらったの初めてで…」

いつの間にか今度は私が彼女を抱きしめていた。

「よし、じゃあおしゃべりいっっぱいした後はそいつらをやっつけに行こう。だから、大丈夫。」

「・・・はいっ」

「あっそう言えばお世話になってるのに名前言ってないね。」

「そういえば。」

二人でくすくすと笑う。

「私ユイって言います。キサラギ…あ、こっちでは逆かな？ユイ・キサラギ」

「ユイ、ですね。私はロイ・ストラクスです。」

そしてお互いに握手をした。

お母さん、なんでかわかんないけど、とりあえずこの国にきちちゃったよ。

某陛下に会う前に友達が出来ちゃった。

これからどうなるかわからないけど、少しだけこの国の優しさに触れたよ。

まだ納得できていないけれど、それでも今自分がいる場所を少しだけ理解した気がした。

ロイとお話をしているといつの間にか夜になっていた。

どうやらお母さんはすでに病気で亡くなっているらしく、家でお父さんと家政婦さんや執事さんたちと一緒に暮らしているらしい。

お金持ち……すごい。

ご飯を食べ終え再び二人（プラス精霊とやら一人）で話しているとドアからノック音が聞こえてきた。

「はい、どうぞ」

ロイがそのノックに返事をするとおじさんが部屋へ入ってきた。

「話は弾んでいるかい？」

「お父様！」

ロイはドアの方へかけて行く。

そうか、あのおじさんがロイのお父さんか。

気まずいながらも二人の方向を向く。

色々二人が話しているとお父さんと目があつた。

「はじめまして。ロイの父親です。」

「はいっはじめまして！ユイ・キサラギです。あの、今日はありがとうございました。」

声をかけられてあまりの緊張にどもってしまふ。

まず看病してもらったことを感謝する。

突然こんな名も知らない人物を家に入れてくれるのだ。

感謝をしなくていつする！

私のその言葉にロイのお父さんは笑みを浮かべる。

「話はロイから聞いている。こちらこそ、ロイの話相手をしてくれてありがとう。とても感謝している。」

そしてロイの頭を撫でるお父さんを見て少しだけ照れる。

感謝することは会ってもあまり感謝されることはなかったからだ。

「具合はどうかね」

「はい、だいぶん良くなりました。」

「それはよかった。回復するまでゆっくりしていつてくれ」
「っこりとこちらを向いてくる。」

とても温かい笑みでこちらまで心が温まってくる。

しばらく話しているとロイのお父さんがさてと立ち上がる。

「私は今から仕事へ行ってくるから、外へ出ないように。」

「まあ今からお仕事？」

ロイの驚きっぷりから推測すると今はもうお父さんが働く時間じゃないのだろう。

ロイの心配そうな顔がうかがえる。

「ああ。王からの直属命令が出された。くわしくはこれから行って聞くがどうやら迎えに行った王妃が行方不明らしい。」

”王”その言葉に心臓がドクンと高鳴る。

「まあ。お父様のところまで来ると言うことはよほど搜索を拡大されているのね。」

「ああ。いつ帰れるかわからない。けど良い子でお留守番していないさい。」

「大丈夫かしら…お風邪をひいていなければよろしいのですが…」

「ロイ…」

「なに？って顔真つ青ですよ?!どうしたのですか?」

ロイが私を心配して私を揺するがそれどころではなかった。

もしかしなくても、クレバーが私を探してる…?

ドクン

心臓が突然大きく鳴り始める。

どうしたんだろう?とどろき音の早さが早くなっていく。

「ユイさん!？」

「ユイ?どうしたんですか?ユイ!？」

「わか、らな、」

「ユイ!!!」

突然うつむいて胸を抑えた私をロイは支える。

ロイやロイのお父さんは何度も私に呼びかけるがもはやそれにこたえる元気もなかった。

ロイは急いで人を呼びに行っているがそれを見ることがすら億劫なくらい今の状況はとてつもなく苦しかった。

ヴィレも心配そうに私の周りを浮いている。

【ユイさん!!これはもしかして結婚印では!？】

ヴィレが結婚印の近くを示す。

「結婚印だと...!？」

ロイのお父さんまで覗いてくる。

言葉も出なくなってきた顔だけでうなづく。

「ユイさん、これをいつどこで!？」

【これを封印した方はどなたですか!？早く探さないと浸食されています!！】

浸食...？

どういふこと？

「もしかして、ユイさん、君が…」

ロイのお父さんが言葉を述べようとすると突然私の体の上に黒い光ができて一瞬目を瞑る。

そして再び目を開けるともう一人精霊が現れていた。

【おぬしか。我が主の愛しき者は】

その精霊は様々なアクセサリーをつけていた。

ピアスやネックレス、はたまた腕輪。そして様々なところに入れ墨。なにより黒い服装やその灰色の長い髪の毛が奇妙さを醸し出していた。

その精霊は私の結婚印のもとへやってくるとそれに触れるか触れないかのところで手を重ねる。

何かを呟くと少しだけ胸の苦しさがなくなった。

「あなたは…？」

【今から転移操作を行う。あとは主がいなければ治らないからな。】

再び何かを口にすると

ベッドのそばに魔方阵みたいなものができた。

そこで光が輝きだす。

眩しくて再び目を閉じる。

そして次の瞬間クレバーが現れていた。

「ユイ！！！！」

ずっと探していてくれたのか、クレバーの顔からは疲労感が感じられる。

クレバーは額の汗を拭うとすぐに私を見つけ私の傍へやってくる。

私はできうる限り後ずさる。

ところがヴィレにさえぎられる。

【ユイさん！？何をしているんですか！？早く施してもらわないと！】

施すって何！？

いつの間にか出ていた涙が止まらないまま首を振る。

しかし目の前にいるクレバーが優しく両手で頬を掴む。

「ユイ、すまない。」

優しい行動に反し切なそうに言葉を発した口は次の瞬間その結婚印にかみついていた。

03（後書き）

久々に書きましたが、難しいですね…

拍手の種類を増やしました！

また見ていただければ幸いです！

かみつかれた個所がとても痛い。

しかし徐々に体が楽になっていく。

噛んでもなおクレバーは私の首筋で何かを唱えている。

私は自分の体が温まるのを感じていた。

「くれ、ばー？」

気づけば目を閉じていた。

再び目を開けるとロイの部屋だった。

クレバーが来ていたのは夢だったのかな？

ふいに首に手をやる。

かさぶたができたようにかさかさする。

押してみると内出血が起こった場所のように痛む。

「夢じゃないの…?」

「夢じゃないよ」

はつと意識を声がした方へ向ける。

クレバーが寂しそうな笑みを浮かべながらベッドに向かってきた。

「体調はどうか?」

「だいぶん良くなりました。」

「そうか。それはよかった。」

あと少しのところで触れるのをやめるクレバーに少しだけ、寂しくなる。

「・・・」

「・・・明日には王宮に戻る。」

「?!」

「もちろん、ユイを連れてね。」

クレバーの声が一段と低く聞こえた。

「私は…」

「結婚印については、全く説明していなかったね。まさかあそこでユイが手を離すとは思っていなかったから」

「それはっ!?!」

あなたが勝手に連れていこうとするかでしょう?!

そう反論しようにもクレバーの冷たい瞳が怖くて思わず口をふさぐ。

「結婚印は世界最古の魔法と言われている。その印は対になるものしか同じものを持たない。その物たちの絆は誰も干渉することができなくなる。例え、国でも、敵国同士でも。そして誰にも、その封印を解くことができない。封印を行った本人たちでもね。それだけこの封印を行うのには覚悟がいるんだ。」

「?!」

そんな重い魔法だと思わず目を見開く。

「今まで記憶をあやふやにしていたから何もなかったけれど、やは

り再び出会ったら結婚印が許してくれなかった。」

「許さないって…何を？」

「俺たちの”愛”だよ。結婚印は二人の絆を誰に対しても絶やすことをさせない代わりにこうやって試すんだ。」

「試す？あれが？」

「試して駄目だったらどうするの？私、あの、死んで…」

その言葉にクレバーが頷く。

「だから結婚印は危険なんだ。その結婚印の資格がないと思ったものに対し肅清を行う。封印した本人を殺すこともできる。」

「…」

「俺はユイに”アクア”を送ったんだ。ユイを、愛していると。」

”愛している”この言葉を発したクレバーはとても寂しそうだった。しかしちよつと考えてみるとおかしくない…？

「それって、私もあなたに対してしなければならぬんじゃないの？」

そう、私がこんなに苦しんだと言うのにクレバーは全く何もなかった。子だった。

私は、彼のことを、”愛していない”のに

「俺は、それを防ぐ力を持っているからね。それに、俺の愛はユイや印が思っている以上に強いらしい。」

クレバーは自分の言った言葉に苦笑していた。

「愛することと愛されることの均衡がおかしいんだろうね。俺は誰からも愛されていない代わりにユイを愛することだけに力を注いでしたっけらしい。」

だんだんベッドに近付いてくるクレバー。

そして私の頬に手を添える。

「ユイ、覚えておいて。俺は、ユイを愛してる。」

「クレバー…」

「君を勝手に連れてきたことは、謝るよ。けれどね、」

そして抱きしめられたけれども振りほどくことができなかった。

「君が俺を許せなくても、愛さなくても、俺はずっと君を愛し続けるよ。」

力が強いのではない。

クレバーの切ない声が私に力を与えてくれなかった。

翌日、朝起きると隣でクレバーが寝ていた。

私を抱きしめたままだった。

手しびれてないのかな・・・？

心配になったが起きようと腕をどかそうとするが全くどかない。

力を込めるとさらに腕の力が強くなる。

おいおい、どうなってるのよ！！！！

そこでふと、私は気づく。

もしかして…

「ちょっと、起きてるんだったら早く離してよ。」

「…我が女神は手厳しいな。」

クスクス笑いながらゆっくりと腕を緩めてくる。

「今すぐ朝食を運ばせよう。」

そして手を振ると一瞬部屋の空気が変わる。

すぐにドアのノックがされるとメイド服のようなものを来た人たちが食事を持って現れた。

メイドさんって本当にいるんだなと呆然としていると後ろの方からロイが現れた。

「ロイ！」

慌てて立ち上がりロイの方へ向かうとロイはほっとした顔をしたのもつかの間スカートを広げ首を垂れてきた。

「おはよう、ございます」

・・・え？

「おはよう。昨日から部屋を有難う。」

「とんでもございません。陛下と皇后のお役にたてるのなら。」

ロイ、どうしちゃったの…？

「ロイ…？」

思わずロイの顔をのぞく。

「ユイ様、おはようございます。お目覚めはいかがだったでしょうか？」

ロイは蒼い顔をしているがその顔にではない。その言葉に驚愕した。

「ロイ…」

「ユイ、様…？」

「ユイ、どうした？」

クレバーが後ろの方で何か言っているが知らない！！！！

「違うっ！！！！私は！！！！」

ロイの顔を自分の方へ向ける。

「皇后なんかじゃない！！！！ユイよ！！！！」

「ゆ、ゆいさ」

「違う！！！！ユイ！！！！」

涙があふれて止まらなかった。

「私！！！！ロイの友達でしょう！？」

ロイの目が見開く。

「ロイは私の友達だよ！？ロイは？違うの…？？」

ロイの肩を必死に揺らす。

「ゆ、ゆい」

涙を浮かべたロイが私に抱きついてくる。

「ゆい、ゆい…」

「ロイ、ありがとう」

私もロイを抱きしめ返した。

04（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
これからもよろしく願いします！

そして私は王宮に連れて行かれた。
もちろんロイとは涙なみだのお別れをした。

「ろっロイっ！！私ここに残るっ！！」

「ユイ……」

この言葉にぎよつとしたのは王宮からの使いの人達。
クレバーの笑顔がだんだんと怖くなっていたらしい。

「ユイ様、皆あなた様を待っております。ですから……」

「ユイ、ストラクス家に迷惑だろう？」

「けどっ……」

「ミスター・ストラクス、」

クレバーに抱きしめられこの時の顔を私はみていないがロイのお父さんの顔面蒼白っぷりをみたら、うん、多分逆らえる人なんかいないんだろうなっと思う。

「ユイ様、是非また遊びにいらしてください。ロイも楽しみにしております。」

「はい。ヴィレも、待ってるわ。」

「っロイいいいい！！！！」

そして無事馬車に乘せられてしまった私。

クレバーは隣でご機嫌だ。

「今日のごはんは何にしようか。ユイの好きなものを作ろう。」

「いや、っていうか作れるの？別の世界のものを」

昨日ロイの家で出たものも多少味は似ているものの、具材が全く知らないものだらけだった。

見なければ食べれるけれど、見てみると少し勇気のいる行為になってしまった。

「同じものは作れないけれど、同じようなものは作ることができる。そのため我が王宮の料理長を鍛え上げたからな。」

他の世界の料理を覚えさせられるとか…不憫だろう料理長。

ハハハと流そうとしていると、窓から精霊が見えた。

どうやら畑に水をやるために水を出す魔法を使おうとしていた。

「そつえばさ、あんたの精霊は？」

「俺の？」

「昨日以来見てないけど…」

「ああ、トウーラか。」

ぼそつと何か呟くと昨日の暗い空気をまとった精霊が出てきた。

【何事か。】

「いいや。ユイがどうしたの？って心配したから召喚したんだ。」

【心配は無用だ。ユイ殿。】

「あ、はい。」

なんか、この子すつごく絡みづらいんだけど…

苦笑いをしているとクレバーが笑いながら補足をする。

「ユイ、紹介するよ。俺のパートナートゥーラだ。」

「ど、どうも…キサラギ・ユイ、です。」

【トゥーラだ。】

シーンとする馬車の中。

もうちょっと、何か話してくれてもいいんじゃない？

「え、えっと、パートナーって精霊は何人もいるんじゃないの？」

トゥーラとの会話は不可能だと判断した私はクレバーに話を振ることにした。

「この世界で言う精霊と言うのは魔法を使うための媒体として使われているんだ。そして必ず一人につき精霊一人しかつけない。契約をするからね。」

「へえ…」

なんかこの世界契約することが多いな…

「この世界ではユイの世界以上に言葉に制約が課せられるんだ。一つひとつが契約につながるんだよ。」

「な、なるほど。」

こやつ、私の気持ちを讀んだな…？

クレバーの固有能力に怖いと思いつながら話を聞く。

「そして精霊を持つにもその持つ本人に魔力がなければ保有することができない。と言うよりも選ばせてくれないかな。」

「選ばせてくれない…？」

「選ぶためにはまず神殿のドアを開くことが必須になる。それができるのは魔力がある人物。その時点で精霊に試されているんだよ。」

「はあ…」

「そしてその中に入ると様々な精霊が待ち受けているんだ。自分の主をずっと待っている。そうして俺が見つけたのはトゥーラだったってわけ。」

「なるほど…」

なんとなくわかったがいまいちよくわかっていない気がする。

それがクレバーにもわかったのだろう。

ニコニコ笑いながら私の方を向いてくる。

それにむかついたのでトゥーラの方を向く。

しかし、精霊ながら様々なアクセサリーをつけているな…

クレバーの趣味なのかな？

じつと見ているのがわかったのかトゥーラが私の方を向く。

【ユイ殿、如何した？】

「いついや、なんでもない…です…」

「トゥーラ、ユイの傍にいてあげて。」

【承知】

すると私の方へやってきて私の膝の上に降り立つ。

「かつ…軽いのね。」

【人間より小さいからな】

「そ、そうね。」

いまいち会話になっているのかわからないのかわからない状態で私は初めての馬車を体験していた。

「でかつ…」

王宮について最初に浮かんだ言葉がこれだ。

本当に大きい、そして真ん中にある城が高い。

「ユイ、ようこそ。我が王宮へ。」

「は、はい…」

馬車から出るとそれはそれはたくさんの人が私たちを出迎えてくれた。

「ここで働いているものたちだ。今日ユイが来るのを心待ちにしていた。」

馬車を降りながら人々を眺める。

とても嬉しそうに歓迎してくれているのが唯一の救いだと思った。そしてそろそろ休ませてくれると思いきやとある広い部屋に連れて行かれた。

行くと机や本棚、ベッドと誰かのプライベートルームのようだった。まあ、うん。誰のかはなんとなくわかるけれど。

「ここは俺のプライベートルームだ。」

そして一つ一つ案内される。

一つドアを開けるとバスルーム。

もちろんくつろぐためにソファもある。

この世界にはテレビが存在しないのか、テレビはなかった。と言うより電気と言うものが存在していないのか灯りもロウソクのようなものだった。

聞いているうちに少しおかしいと疑問がわく。

「ちょ、ちよつと待って、私もここなの？こんな広いお城で私一人の部屋とかないわけ？」

「……」

「ちよつと！まずそこに連れて行くべきなんじゃないの！？」

そうおかしい。なぜこんな広いお城の中でちまちまと二人一緒の部屋でなければならぬのか。

ハリボテ出ない限りあり得ない。

「しかも、べつ…ベットが一緒だなんてちよつと待って欲しいんだけど。」

いくら王妃っていう肩書でここに来たからと言って私は別に彼のことを「愛していない」のだから。

「俺はソファで寝る。だからここにいてくれ。」

「隣とかにないわけ？普通王妃の部屋ってそういう構造になって
いるんじゃないの？」

どうしてそこまで一緒にいたいのかわからない。

私にはその気持ちがないからわかるはずもないのだけれど。

「それなら王妃の部屋に俺も移る。」

「だから、」

「何もしないし一緒にいるだけで良いんだ。話さなくても良い。傍
にいただけで、ただそれだけでいい。」

ぎゅっと握られる手。

まただ。私はこの手を振り払えない。

同情なのか、それとも怖いからなのか。

良くわからないこの感情。

そして私はまた頷くしかなかった。

05（後書き）

久々の更新です。

トウーラは割と好きなキャラだけでも、台詞を考える時にすつこく考えます（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0612x/>

世界は君のために

2012年1月8日01時47分発行